

「子どもが感じる世界」を感じるという教育

2018 年 3 月

子ども教育学会 会長

宇田川 久美子

2008 年 4 月、相模女子大学に子ども教育学科が誕生し、同年 6 月に学科に所属する教員により子ども教育学会が発足した。そして 2018 年、「子ども教育研究」も 10 号を刊行するに至り一つの節目を迎えた。この 10 年間を振り返ってみると、子ども教育の喫緊の課題に取り組みながら常に頭で考えることばかりが多かったように感じる。なぜいま、このようなことを感じるのかといえば、目の見えない人が見ている世界と出会ったからである。

目の見えない人は、目の見えている人とは違う見方で世界を見ているという（伊藤亜紗著『目の見えない人は世界をどう見ているか』光文社新書 2015 年）。目の見えない人が大岡山から東京工業大学まで歩いたとき、途中、緩やかな坂道を下っていると「大岡山ってやっぱり山で、いまその斜面を降りているんですね」と言ったという。ふっともれたその言葉に、著者はかなり驚いたそうだ。著者にとってその坂は出発点と到着点を結ぶ道の一部でしかなかったからだ。しかし目の見えない人は坂道を下りながら、その坂を俯瞰的な空間で捉え、山であることを感じたのである。これは見ることで坂の映像が頭に入る見方とは違う。感じることで坂がどういうものであるかがわかる見方なのではないだろうか。

そういえば幼稚園で教員として子どもとかかわっていたころ、子どもの表情、まなざし、しぐさなどから子どもがわかる瞬間が確かにあった。映像として頭に入ってくるのは、子どもの表情、まなざし、しぐさでありながら、それを見て、感じることで、子どもが何を思っているのか、何をしようとしているのか、どういう事態が起こっているのかが把握されるのである。これは感じることでわかる見方と似ている。そう考えると、「見ること」は「わかること」であり、それは「感じること」とつながっている。

ある幼稚園で色に興味をもった子どもたちに、絵の具の色混ぜ実験をして何色と何色を混ぜると何色になるという知識を与えようと計画を立てた保育者がいた。ところが実際に、ある子どもは 2 色の絵の具を混ぜてできた色を見て「おじいさんの色！」と言葉を発したのである。混ぜる絵の具の量や水の量によって微妙に異なる色合いに、子どもが感じたままを表現したのだった。それを「おもしろい」と感じた保育者は計画を変更した。子どもたちが色をじっくり見て、感じたことで仲間分けをする活動へと展開したのである。怖い色、寂しい色、嬉しいときの色を発見したり、似ている色でも感じる違うことを発見した子どもたちは、微妙なさじ加減で色を巧みに混ぜ、自分たちが思い描く色合いをつくりだすようになった。ここには子どもたちが色そのものをわかっていく過程がある。「子どもが感じる世界」を感じるという教育のあり方があってもよいのではないだろうか。